

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



日本LD学会会報

第43号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギシヨウビル2F TEL. 028-649-0090 FAX. 649-1213

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/>

応用行動分析学のすすめ

東京学芸大学名誉教授

山口 薫

アメリカ合衆国のLDやADHDの教育を視察して注目させられるのは、応用行動分析学の原理が多かれ少なかれ使われていることである。

応用行動分析学の中心原理である正の強化が使われているのはもちろんであるが、グループ指導の場面では、直接ご褒美をあげる代わりに、トークンポーカーチップやチャンスカードを与え、一日の授業の終わりに、あるいは週末に、お店を開いて、文房具や玩具、ときにはキャンデーなどと一定数のトークンと交換するトークンシステムを使うことが多い。罰技法としては、レスポンスコスト、タイム・アウトが使われ、タイム・アウト室を設けている養護学校もある。

応用行動分析はヨーロッパではあまり使われず、日本でも自閉症の教育などでは精神分析の立場に立つ心理療法がこれまでのところ中心である。

ある自閉症の施設では、ガラス瓶を壊すことに興味のある子どもにはガラス瓶を山積みにした部屋で好きなだけガラス瓶を壊させ、衣服を着るのが嫌な女の子は裸で施設中を駆け回らせていた。

いわゆる完全受容というのだろうか。

昔、東京都の就学指導委員会で、ある高名な先生の「学校などへ行かせては駄目だ。家で赤ん坊を育てると同じように母親が可愛がればことばが出る」という教えに従って、15歳まで毎年就学猶予を重ねたが、結局ことばは出ず、その時点で親もやっと養護学校の高等部に就学させたという事例があった。

どの技法を使うかは、もちろん指導者、また保護者の自由な選択に任せなければならないが、私には、完全受容などと言っている間に発達の重要な機会が失われていくのが惜しまれてならない。応用行動分析はもちろん万能ではないが、かなりの程度子どもの行動を望ましい方向に変えることができることは私の経験からも確実である。

「動物の餌付けと同じか?」「あめ玉をやらないと何もしない子どもになるのでは?」といった素朴な疑問に応えるためにも、是非応用行動分析を学び、そして先ず実践してみたい。